HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第10章　地域の意識・行動とアイヌ民族との交流・意識
Author(s)	新藤, 慶
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 35, 229-257
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61417
Type	departmental bulletin paper
File Information	910_ch10.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第10章　地域の意識・行動とアイヌ民族との交流・意識

新藤　慶　群馬大学教育学部准教授

はじめに

本章では、アイヌ民族多住地域の住民の地域の意識や行動と、アイヌ民族との交流や意識がいかに結びついているかを明らかにすることを目的とする。その際、これらの交流や意識について、地域間比較を行う。このような分析をふまえ、今後のアイヌ民族をめぐる問題に対し、地域の観点からの示唆を導くことを目指したい。

そこで本章では、新藤（2015a）の枠組みをもとに、新ひだか町･伊達市･白糠町の比較を中心に、札幌市・むかわ町との比較も取り入れながら、地域の意識・行動とアイヌ民族との交流・意識の関連について明らかにする。

第１節　居住地域の意識と行動

はじめに、居住地域の意識と行動を確認する。まず、居住地域への根づき方を見るために、出身地域をまとめた（表10－１）。これを見ると、すべての地域で「北海道内の他市町村」がもっとも多く、全体で46.6%を占めている。ただし、札幌や伊達など市部では「北海道内の他市町村」が過半数となっているが、むかわ・新ひだか・白糠では「現住所」や「現住所以外の市町内」がほぼ半数となっており、町部ではおよそ半分の人々が今住んでいる町のなかで生まれていることがわかる。

表10－１　地域別に見た出身地域

	現住所	現住所以外の市町内	北海道内の他市町村	東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄	外国	N
新ひだか	15.9	36.0	38.3	2.3	3.1	0.2	1.3	0.4	1.3	1.1	522
伊達	11.1	23.6	55.3	2.7	2.9	0.5	0.7	0.2	0.9	2.2	588
白糠	14.2	34.6	42.7	4.5	0.7	0.2	0.5	0.2	0.2	2.1	422
札幌	6.8	24.8	54.1	2.8	5.9	1.0	1.9	—	0.9	1.9	577
むかわ	22.1	27.9	40.2	3.0	2.1	0.6	0.6	0.6	0.2	2.8	530
合計	13.8	29.0	46.6	3.0	3.1	0.5	1.0	0.3	0.7	2.0	2639

$p<.001$（χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

また、表10－１で見た出身地からの移動が多い札幌・伊達では、「自分の代」から現住地に居住したという者が約半数となっている（表10－２）。一方、むかわ・新ひだかは、「祖父母の代」「祖父母より前」という祖父母の代以前から居住している者が４割以上となっている。白糠は、自分の代：親の代：祖父母の代以前＝３：３：４といった割合になっており、それぞれの時期に居住を始めた層がほぼ同じ程度存在している。

表10－２　地域別に見た居住開始世代

	自分の代	親の代	祖父母の代	祖父母より前	N
新ひだか	34.8	22.7	26.8	15.7	497
伊達	46.0	21.8	17.0	15.2	565
白糠	29.3	31.7	29.5	9.4	413
札幌	54.1	28.7	11.8	5.4	560
むかわ	33.1	22.7	28.8	15.3	510
合計	40.3	25.3	22.2	12.2	2545

$p<.001$（χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

家族の居住年数を見ると、祖父母の代以前という者が多かった新ひだか・白糠で「70年以上」が最も多く、３割前後となっている（表10－３）。また、「自分の代」が多い伊達・札幌では、「10年未満」から50ないし60年未満が２桁の数字になっている。一方、「親の代」が比較的多かった白糠では、30年未満は少なく、30年以上の各カテゴリーが２桁となっている。

表10－３　地域別に見た家族の居住年数

	10年未満	10～20年未満	20～30年未満	30～40年未満	40～50年未満	50～60年未満	60～70年未満	70年以上	N
新ひだか	11.2	8.3	5.9	10.3	13.6	12.1	4.7	33.9	339
伊達	17.2	17.5	13.7	14.0	14.3	5.7	7.6	9.9	314
白糠	8.0	3.8	8.9	14.1	15.0	16.0	19.2	15.0	213
札幌	12.0	14.3	16.2	16.0	19.3	15.4	1.7	5.0	357
むかわ	12.7	10.6	7.8	8.6	11.8	8.6	13.1	26.9	245
合計	12.5	11.4	10.8	12.7	15.1	11.5	8.1	17.8	1468

$p<.001$（χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

自身の居住年数をまとめた表10－４を見ると、新ひだかと伊達で、20年未満があわせて約３分の１と、他の地域に比べて多くなっている。表10－２から、両地域は「自分の代」での居住開始の割合が２番目と３番目に高いことから、自身の居住年数も比較的短くなっていると捉えられる。一方、「自分の代」での居住開始の割合が最も高い札幌では、「40～50年未満」の21.4%が最も多く、「自分の代」だけれども、居住年数は比較的長めであることがうかがえる。これらに対し、むかわでは「70年以上」の割合が11.8%と、他の地域に比べて高い。

それぞれの地域の平均年齢を見ると、新ひだか56.06歳、伊達57.00歳、白糠58.45歳、札幌51.60歳、むかわ57.98歳と、札幌だけがやや低くなっている。しかし、札幌以外の地域は57歳前後でほとんど差がないので、同じ年齢層だが、比較的居住年数の短い新ひだか・伊達、居住年数の長いむかわ、その中間に位置する白糠という状況になっていることがわかる。

表10－４　地域別に見た自身の居住年数

	10年未満	10～20年未満	20～30年未満	30～40年未満	40～50年未満	50～60年未満	60～70年未満	70年以上	N
新ひだか	19.5	13.0	11.9	17.0	19.1	12.3	5.1	2.2	277
伊達	18.1	19.5	16.2	12.9	19.0	6.0	4.1	4.1	364
白糠	13.3	6.7	13.8	17.3	19.1	16.0	10.2	3.6	255
札幌	10.6	10.8	16.0	20.6	21.4	13.5	3.9	3.3	519
むかわ	8.0	6.5	9.5	13.4	14.9	19.3	16.6	11.8	476
合計	13.1	11.2	13.5	16.3	18.6	13.6	8.1	5.5	1861

$p<.001$（χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

続いて、地域の評価と行動を聞いた10項目と、調査地域との関連を検討する。地域への評価を問う７項目のうち、「（この地域は）誰でも自由にものが言える」については有意差が生じておらず、全体では、「とてもそう思う」6.0%、「ある程度そう思う」45.8%、「あまりそう思わない」41.8%、「まったくそう思わない」6.4%と、正規分布に近い形になっている。これに対し、他の６項目は有意差を生じた。順に見ていきたい。

まず、「住民のまとまりが強い」についての回答を表10－５に掲げた。ここからは、新ひだかとむかわで、肯定的な評価（「とてもそう思う」＋「ある程度そう思う」、以下同様）が過半数となっていることがわかる。一方、伊達･白糠･札幌では、否定的な評価（「あまりそう思わない」＋「まったくそう思わない」、以下同様）が過半数である。ここから、一つには市部である伊達・札幌では住民のまとまりが弱いこと、一方、同じ郡部でも、新ひだか・むかわと白糠では状況に違いが見られることがうかがえる。白糠は釧路市という中核的地域に接しているという状況から、やや市部に近い状況を示しているのかもしれない。

表10－５　地域別に見た「住民のまとまりが強い」への評価

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	N
新ひだか	6.5	47.1	42.9	3.5	490
伊達	2.0	34.2	55.6	8.2	559
白糠	2.2	40.5	52.6	4.7	405
札幌	4.6	39.4	46.3	9.8	564
むかわ	5.7	53.4	36.8	4.1	511
合計	4.2	42.7	46.8	6.2	2529

$p<.001$（χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

ただし、この「住民のまとまり」は、排他性の強さとも重なるところがある。「新しく来た人でもなじみやすい」という回答をまとめた表10－６を見ると、札幌の肯定的評価の割合は高いけれども、新ひだか・白糠は否定的評価が過半数である。この点は、住民のまとまりが強いから、逆に

新しい人がなじみにくい状況を生んでいるといえる。

しかし、むかわでは、住民のまとまりが強く、かつ新しくきた人でもなじみやすい、という回答が多数派となっている。逆に、伊達は、住民のまとまりが弱く、新しくきた人もなじみにくいという形になっている。このように対照的な傾向を示すむかわと伊達だが、この２地域が共通した傾向を示すのが「日常的な付き合いが盛ん」という項目である。

表10－６　地域別に見た「新しくきた人でもなじみやすい」への評価

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	N
新ひだか	5.4	32.1	57.5	5.0	501
伊達	6.0	39.8	49.4	4.8	565
白糠	4.2	36.8	53.2	5.7	402
札幌	7.1	56.4	29.6	6.9	564
むかわ	5.0	52.5	37.1	5.4	518
合計	5.6	44.1	44.7	5.6	2550

$p<.001$（χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より[1)]。

この項目をまとめた表10－７を見ると、伊達とむかわ、そして新ひだかでは、肯定的な回答が過半数となっている。このようにともに「日常的な付き合いが盛ん」であるが、付き合いが盛んであるからこそ、むかわでは住民のまとまりも強く、新しい人もなじみやすいと感ぜられ、伊達では、逆に付き合いのある人々とそうでない人々の差が意識されて、住民のまとまりも、新しい人のなじみやすさもネガティブに評価されているのかもしれない。一方、白糠・札幌では、否定的回答が過半数である。

表10－７　地域別に見た「日常的な付き合いが盛ん」への評価

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	N
新ひだか	4.1	47.9	44.6	3.5	491
伊達	5.2	46.4	43.6	4.8	562
白糠	2.8	40.0	51.0	6.3	400
札幌	3.0	26.7	53.6	16.7	562
むかわ	5.5	53.3	36.1	5.1	510
合計	4.2	42.7	45.7	7.5	2525

$p<.001$（χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

また、近所の人たちとの交流（表10－８）については、より明瞭な差が見られる。近所の人と、「互いの家をよく行き来する」「会った際に世間話をする」など、話をする以上の関係を持つ者が新ひだか・白糠・むかわでは過半数であり、伊達も半数弱にのぼっているのに対し、札幌だけが約４分の１にとどまっている。大都市である札幌での近所づきあいの少なさが表れている。

表10－８　地域別に見た近所の人たちとの交流

	互いの家を よく行き来する	会った際に 世間話をする	道で会えばあいさつ をかわす程度	近所の住民と 付き合いはない	N
新ひだか	9.9	43.0	42.2	4.8	516
伊達	8.8	37.8	50.2	3.3	580
白糠	9.5	42.3	44.3	3.9	411
札幌	1.9	24.8	63.9	9.4	565
むかわ	10.8	43.0	42.0	4.2	528
合計	8.0	37.8	49.0	5.2	2600

$p<.001$（χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

また、住民間の交流や地域活動の場となる町内会活動についても、札幌と、札幌以外で違いが見られる。表10－９を見ると、札幌以外では町内会活動参加についての肯定的な回答が過半数であるのに、札幌では３割弱である。この点からも、都市部での住民間の関係や地域参加が弱くなっていることがうかがえる。

表10－９　地域別に見た町内会活動への参加

	積極的に 参加している	ある程度 参加している	あまり 参加していない	まったく 参加していない	N
新ひだか	21.0	46.4	17.9	14.6	519
伊達	11.6	41.5	26.5	20.5	586
白糠	24.3	43.2	22.4	10.0	419
札幌	3.8	25.5	30.9	39.7	572
むかわ	20.9	47.7	20.6	10.8	535
合計	15.7	40.5	23.9	19.9	2631

$p<.001$（χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

「昔からの文化・習慣を大事にする」では、評価が明瞭にわかれた（表10－10）。むかわは、肯定的回答が過半数である。また、新ひだかは、否定的回答が過半数だが、相対的には肯定的回答が多めである。これらの比較的農漁村的である地域では、肯定的な評価が高めとなっている。逆に、伊達・白糠・札幌の市部や市部周辺では、否定的回答が多い。

表10－10　地域別に見た「昔からの文化・習慣を大事にする」への評価

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	N
新ひだか	6.1	40.7	44.6	8.6	489
伊達	2.5	25.1	57.3	15.1	562
白糠	1.5	34.2	51.9	12.5	401
札幌	2.7	32.7	51.7	12.9	559
むかわ	10.9	47.0	38.4	3.7	513
合計	4.8	35.7	48.9	10.6	2524

$p<.001$（χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

一方、「昔から住んでいる人の意見が強い」は、同じ「昔」の話題ではあるけれども、異なった様相を示している。表 10 － 11 を見ると、「昔からの文化・習慣を大事にする」と同様に、「昔から住んでいる人の意見が強い」も肯定的回答が多く、文化も人も、長く根づいていることの影響力の大きさが見られる。これに対し、新ひだかでは、昔からの文化・習慣は大事にされているが、昔から住んでいる人の意見が強いわけではない様子が見られる。伊達・白糠については、昔からの文化も、昔から住んでいる人も、影響力が大きくないことがうかがえる。

表10－11　地域別に見た「昔から住んでいる人の意見が強い」への評価

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	N
新ひだか	3.7	39.9	41.7	14.7	489
伊達	1.9	27.1	45.3	25.7	565
白糠	2.2	38.7	45.7	13.4	403
札幌	6.4	28.0	53.0	12.6	564
むかわ	14.9	46.3	36.7	2.2	510
合計	5.9	35.5	44.6	13.9	2531

$p<.001$（χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

さらに興味深いのは、「新しいものを積極的に受け入れる」である（表 10 － 12）。新ひだか・伊達・白糠は肯定的評価が多く、札幌・むかわでは否定的評価が多い。新ひだか・伊達・白糠では、「昔から住んでいる人の意見」が強くないことの表れとして、「新しいものを積極的に取り入れる」姿勢が感じられているのかもしれない。

表10－12　地域別に見た「新しいものを積極的に取り入れる」への評価

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	N
新ひだか	13.4	52.0	31.1	3.5	492
伊達	9.4	54.8	32.7	3.0	562
白糠	9.0	55.4	32.3	3.3	399
札幌	5.0	41.5	46.1	7.4	564
むかわ	2.5	31.8	56.9	8.8	510
合計	7.8	46.7	40.2	5.3	2527

$p<.001$（χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

このような形で評価される各地域だが、今後の居住希望は表10－13のように、「いまの場所にずっと住みたい」が過半数となっている。最も割合の高い札幌では90.4%、最も割合の低いむかわでも74.8%となっている。

表10－13　地域別に見た今後の居住希望

	いまの場所にずっと住みたい	別の場所に移りたい	別の場所に移る予定がある	N
新ひだか	81.5	12.6	5.8	428
伊達	86.0	9.2	4.8	479
白糠	76.0	19.3	4.7	342
札幌	90.4	7.0	2.6	498
むかわ	74.8	17.0	8.2	440
合計	82.3	12.5	5.2	2187

$p<.001$（χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

「いまの場所にずっと住みたい」との回答の理由を、複数回答で尋ねたものが表10－14である。これを見ると、札幌以外の4地域では「土地や家があるから」が最も多くなっており、札幌では「生活環境が良いから」が最も多いことがわかる。「生活環境が良いから」は、伊達（55.9%）、新ひだか（42.8%）でも、比較的多くあげられている。

表10－14　地域別に見た現住所居住希望の理由（複数回答）

	生活環境が良いから	人間関係が良いから	親の面倒を見るため	土地や家があるから	職場や学校が近いから	その他	N	M.T.計
新ひだか	42.8	17.2	17.2	65.6	14.7	5.6	360	163.1
伊達	55.9	14.5	13.8	68.0	13.1	5.1	435	170.4
白糠	22.8	13.9	16.7	77.6	14.9	6.4	281	152.3
札幌	70.3	13.7	12.4	51.1	20.9	7.7	468	176.1
むかわ	27.4	19.0	9.0	70.6	12.0	6.4	343	144.4
合計	46.8	15.5	13.7	65.2	15.4	6.3	1887	162.9

注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

これに対し、「別の場所に移りたい」理由は、表10－15にまとめたとおりである。いずれの地域でも「交通の便が悪いから」があげられることが最も多く、新ひだかについては「生活環境が悪いから」も同数となっている。また、「その他」が多いが、これは、「専門の病院がない」「子供が住む所へ移りたい」など、今後の加齢に伴う病院通いの不便さや、都市部に出ている子どもの家での同居を念頭に置いた回答が多くなっている。

表10－15　地域別に見た現住所転居希望の理由（複数回答）

	生活環境が悪いから	人間関係が悪いから	交通の便が悪いから	別の場所に土地や家があるから	よい仕事がないから	職場や学校が遠いから	その他	N	M.T.計
新ひだか	27.7	15.4	27.7	10.8	21.5	4.6	30.8	65	138.5
伊達	24.2	22.7	36.4	6.1	24.2	4.5	39.4	66	157.5
白糠	22.7	9.1	37.5	8.0	25.0	6.8	35.2	88	144.3
札幌	18.0	10.0	18.0	2.0	12.0	—	50.0	50	110.0
むかわ	27.2	15.2	53.3	8.7	21.7	5.4	27.2	92	158.7
合計	24.4	14.4	36.8	7.5	21.6	4.7	35.2	361	144.6

注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

「別の場所に移る予定がある」については、その多くが「転勤があるから」と回答している（表10－16）。また、「その他」が多くなっているが、これは「病院の数」や「子供の所」など、表10－15と同様に、通院の事情や子どもの住む家への同居といった事情で移る予定があるとのことである。

表10－16　地域別に見た現住所転居の理由（複数回答）

	就職するから	転勤があるから	結婚するから	進学するから	その他	N	M.T.計
新ひだか	3.3	53.3	—	10.0	33.3	30	100.0
伊達	10.3	37.9	3.4	—	51.7	29	103.3
白糠	3.2	22.6	6.5	—	67.7	31	100.0
札幌	13.0	39.1	4.3		43.5	23	100.0
むかわ	4.5	45.5	—		50.0	44	100.0
合計	6.4	40.1	2.5	1.9	49.7	157	100.6

注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

ここまでの地域に対する評価の結果を、表10－17にまとめた。これは肯定的・積極的回答と否定的・消極的回答のいずれが多かったかをまとめた非常にシンプルなものである。これを見ると、とくに本章で比較分析を行う新ひだか・伊達・白糠は、10項目中７項目が共通しており、地域に対する評価は類似したものとなっている。ここから、やや強引に各地域の差異を見出すとすれば、「住民のまとまりが強い新ひだか」、「日常的な付き合いが盛んでない白糠」、「近所の人たちとの交流の乏しい伊達」ということになる。

表10－17　地域別に見た地域に対する評価の状況

	誰でも自由にものが言える	住民のまとまりが強い	新しくきた人でもなじみやすい	日常的な付き合いが盛ん	近所の人たちとの交流	町内会活動への参加	昔からの文化･習慣を大事にする	昔から住んでいる人の意見が強い	新しいものを積極的に取り入れる	今後の居住希望
新ひだか	○	○	×	○	○	○	×	×	○	○
伊達	○	×	×	○	×	○	×	×	○	○
白糠	○	×	×	×	○	○	×	×	○	○
札幌	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○
むかわ	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○
合計	○	×	×	×	×	○	×	×	○	○

注）1.「今後の居住希望」以外は、いずれの項目も4件法で尋ねているため、肯定的・積極的回答２件の合計が過半数だった場合に「○」、否定的・消極的回答2件の合計が過半数だった場合に「×」を入れている。
2.「今後の居住希望」は、「いまの場所にずっと住みたい」が過半数である場合に「○」とした。

第２節　地域の意識・行動から見たアイヌの人々との交流

続いて、前節で確認したいくつかの地域に対する意識や地域での行動と、アイヌの人々との交流の関係を検討する。

まず、出身地域との関連を表 10 － 18 にまとめた。ここからは、他の章でも触れられているが、新ひだかとむかわは、交流が「よくある」や「たまにある」という肯定的回答が多いのに対し、伊達・白糠・札幌は「あまりない」や「ほとんどない」という否定的回答が多いことがわかる。また、出身地別に見ると、「同一市町内」＞「北海道内の他市町村」＞「道外」の順に交流の程度が低下しており、とくに新ひだかでは「同一市町内」と「北海道内の他市町村」は肯定的回答が過半数であるのに対し、「道外」は否定的回答が過半数となっている。このことから、現住所に近いところの出身であるほど、交流の頻度が高いことがうかがえる。ただし、新ひだか以外の地域は、出身地による差はあるけれども、むかわはいずれも積極的回答が過半数、伊達・白糠・札幌は消極的回答が過半数となっている。

表10－18　地域別・出身地別に見たアイヌの人々との交流

		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	N
新ひだか	同一市町内	27.4	33.8	15.8	22.9	266
	北海道内の他市町村	25.4	26.9	20.7	26.9	193
	道外	6.5	26.1	17.4	50.0	46
	合計	24.8	30.5	17.8	26.9	505
伊達	同一市町内	6.9	11.3	15.3	66.5	203
	北海道内の他市町村	4.7	7.2	15.4	72.7	319
	道外	3.4	11.9	11.9	72.9	59
	合計	5.3	9.1	15.0	70.6	581
白糠	同一市町内	14.0	22.0	28.5	35.3	200
	北海道内の他市町村	8.5	22.2	19.3	50.0	176
	道外	14.3	22.9	28.6	34.3	35
	合計	11.7	22.1	24.6	41.6	411
札幌	同一市町内	0.6	1.1	5.0	93.4	181
	北海道内の他市町村	0.3	2.9	4.9	91.9	308
	道外	1.2	8.4	6.0	84.3	83
	合計	0.5	3.1	5.1	91.3	572
むかわ	同一市町内	31.6	34.0	18.2	16.2	253
	北海道内の他市町村	20.9	31.1	18.9	29.1	206
	道外	23.5	29.4	9.8	37.3	51
	合計	26.5	32.4	17.6	23.5	510
合計	同一市町内	17.8	22.2	16.8	43.2	1103
	北海道内の他市町村	10.2	15.6	14.7	59.5	1202
	道外	8.4	17.9	12.8	60.9	274
	合計	13.3	18.7	15.4	52.7	2579

新ひだか：$p<.01$、伊達：$p=.471$、白糠：$p<.1$、札幌：$p<.1$、むかわ：$p<.01$、合計：$p<.001$（いずれも χ^2検定）

注）1. 表10－１の「現住所」「現住所以外の市町内」を「同一市町内」、「北海道内の他市町村」はそのまま「北海道内の他市町村」、これら以外を「道外」とした。
2. 単位＝人、%。
3. 不明・無回答を除く。

資料：実態調査より。

居住世代別に見た表10－19からは、「自分の代」＜「親の代」＜「祖父母の代」＜「祖父母より前」と、居住世代が古くなるにしたがって、アイヌの人々との交流が盛んになる様子が見てとれる。とくに、新ひだかとむかわでは、「自分の代」では、アイヌの人々との交流が「あまりない」「ほとんどない」という否定的回答が過半数であるが、「親の代」以前に居住を開始した世代では、「よくある」「たまにある」という肯定的回答が過半数となっている。

表10－19　地域別・居住世代別に見たアイヌの人々との交流

		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	N
新ひだか	自分の代	20.0	28.5	20.0	31.5	165
	親の代	27.5	30.3	11.0	31.2	109
	祖父母の代	29.0	32.8	18.3	19.8	131
	祖父母より前	27.0	31.1	24.3	17.6	74
	合計	25.3	30.5	18.2	26.1	479
伊達	自分の代	4.7	8.2	16.0	71.2	257
	親の代	6.7	7.5	13.3	72.5	120
	祖父母の代	9.4	11.5	13.5	65.6	96
	祖父母より前	2.3	10.5	17.4	69.8	86
	合計	5.5	8.9	15.2	70.3	559
白糠	自分の代	7.7	22.2	21.4	48.7	117
	親の代	14.0	28.7	24.0	33.3	129
	祖父母の代	10.9	18.5	26.9	43.7	119
	祖父母より前	21.1	18.4	28.9	31.6	38
	合計	11.9	22.8	24.6	40.7	403
札幌	自分の代	0.7	5.0	3.3	91.0	300
	親の代	—	1.3	7.5	91.2	159
	祖父母の代	1.5	1.5	9.2	87.7	65
	祖父母より前	—	—	3.3	96.7	30
	合計	0.5	3.2	5.2	91.0	554
むかわ	自分の代	18.9	30.5	15.9	34.8	164
	親の代	31.9	39.8	11.5	16.8	113
	祖父母の代	30.4	30.4	20.3	18.8	138
	祖父母より前	32.0	28.0	25.3	14.7	75
	合計	27.1	32.2	17.6	23.1	490
合計	自分の代	8.7	15.9	13.5	62.0	1003
	親の代	14.6	20.0	13.3	52.1	630
	祖父母の代	18.8	21.7	18.8	40.8	549
	祖父母より前	17.8	19.8	21.1	41.3	303
	合計	13.5	18.7	15.5	52.3	2485

新ひだか：$p<.1$、伊達：$p=.599$、白糠：$p<.126$、札幌：$p<.1$、むかわ：$p<.001$、合計：$p<.001$（いずれもχ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

また、家族の居住年数についても、同様の傾向が指摘できる。家族の居住年数をほぼ4分の1ずつになるように20年ごとに区切ってまとめた表10－20を見ると、全体としては、家族の居住年数が長くなるほどアイヌの人々との交流について肯定的な回答が多くなる。とくに、新ひだかとむかわでは、「20年未満」では否定的回答が過半数であるのに対し、20年以上の各カテゴリーでは、肯定的回答が過半数となっている。

表10－20　地域別・家族の居住年数別に見たアイヌの人々との交流

		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	N
新ひだか	20年未満	11.3	16.1	21.0	51.6	62
	20～40年未満	27.8	29.6	16.7	25.9	54
	40～60年未満	22.6	38.1	16.7	22.6	84
	60年以上	27.3	38.1	21.1	22.7	128
	合計	23.2	29.0	19.2	28.7	328
伊達	20年未満	1.9	5.6	14.8	77.8	108
	20～40年未満	2.3	8.1	18.6	70.9	86
	40～60年未満	6.5	11.3	16.1	66.1	62
	60年以上	9.1	14.5	12.7	63.6	55
	合計	4.2	9.0	15.8	71.1	311
白糠	20年未満	—	4.2	16.7	79.2	24
	20～40年未満	6.3	37.5	18.8	37.5	48
	40～60年未満	14.5	21.0	24.2	40.3	62
	60年以上	16.4	28.8	26.0	28.8	73
	合計	11.6	25.6	22.7	40.1	207
札幌	20年未満	1.1	4.3	2.1	92.6	94
	20～40年未満	—	5.3	5.3	89.5	114
	40～60年未満	0.8	2.5	8.3	88.3	120
	60年以上	—	—	4.2	95.8	24
	合計	0.6	3.7	5.4	90.3	352
むかわ	20年未満	10.5	26.3	10.5	52.6	57
	20～40年未満	23.7	34.2	21.1	21.1	38
	40～60年未満	27.1	39.6	18.8	14.6	48
	60年以上	42.7	33.3	14.6	9.4	96
	合計	28.9	33.1	15.5	22.6	239
合計	20年未満	4.6	10.4	11.9	73.0	345
	20～40年未満	8.5	17.6	14.1	59.7	340
	40～60年未満	12.2	19.7	15.4	52.7	376
	60年以上	24.7	26.1	18.1	31.1	376
	合計	12.8	18.6	15.0	53.6	1437

新ひだか：$p<.01$、伊達：$p=.217$、白糠：$p<.01$、札幌：$p=.578$、むかわ：$p<.001$、合計：$p<.001$（いずれも χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

また、自身の居住年数との関連をまとめた表10－21でも、居住年数が長くなるほどアイヌの人々との交流に対する肯定的回答の割合が高くなる傾向が見出される。とくに、新ひだか・むかわでは、20年以上の居住年数を持つ人々で、アイヌの人々との交流についての肯定的回答が過半数となっている。また、すべての地域で有意差を生じており、この点では、家族の居住年数以上に強い説明力をもっていることがうかがえる[2)]。

表10－21　地域別・自身の居住年数別に見たアイヌの人々との交流

		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	N
新ひだか	20年未満	9.4	16.5	23.5	50.6	85
	20～40年未満	29.5	29.5	16.7	24.4	78
	40～60年未満	21.2	38.8	20.0	20.0	85
	60年以上	16.7	50.0	16.7	16.7	18
	合計	19.5	29.7	19.9	30.8	266
伊達	20年未満	2.2	5.1	15.4	77.2	136
	20～40年未満	3.8	6.7	16.3	73.1	104
	40～60年未満	8.9	11.1	16.7	63.3	90
	60年以上	6.9	20.7	20.7	51.7	29
	合計	4.7	8.4	16.4	70.5	359
白糠	20年未満	2.3	11.4	18.2	68.2	44
	20～40年未満	5.8	34.8	20.3	39.1	69
	40～60年未満	17.1	17.1	23.7	42.1	76
	60年以上	17.2	17.2	27.6	37.9	29
	合計	10.6	21.6	22.0	45.9	218
札幌	20年未満	0.9	6.3	-	92.8	111
	20～40年未満	-	2.1	6.9	91.0	188
	40～60年未満	0.6	2.3	7.3	89.8	177
	60年以上	2.7	-	2.7	94.6	37
	合計	0.6	2.9	5.3	91.2	513
むかわ	20年未満	10.3	27.9	10.3	51.5	68
	20～40年未満	22.6	22.6	22.6	32.1	106
	40～60年未満	31.2	36.9	19.1	12.7	157
	60年以上	38.6	35.6	18.1	8.7	127
	合計	28.2	31.7	18.3	21.8	458
合計	20年未満	4.5	11.7	12.6	71.2	444
	20～40年未満	10.1	15.0	14.9	60.0	545
	40～60年未満	15.2	20.2	15.9	48.7	585
	60年以上	25.0	26.7	17.1	31.3	240
	合計	12.3	17.4	14.9	55.3	1814

新ひだか：$p<.001$、伊達：$p<.05$、白糠：$p<.01$、札幌：$p<.05$、むかわ：$p<.001$、合計：$p<.001$（いずれも χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

続いて、地域に対する評価とアイヌの人々との交流との関係を見たものを、表10－22にまとめた。ここでは、地域別・項目別に有意確率を記し、有意差が生じているものについては、その項目に肯定的回答をしているほどアイヌの人々との交流が活発になっていれば「＋」、逆であれば「－」、弱い関連が見られる場合は（　）つきで、明瞭な関係が見られない場合は「？」を記載している。

このうち、すべての地域で有意差が生じたのは、「町内会活動への参加」である。この点をまとめた表10－23を見ると、すべての地域で、町内会活動に積極的に交流している人ほど、アイヌの人々との交流も盛んであることがわかる。とくに、新ひだかとむかわでは、町内会活動への参加について肯定的な回答をしている人は、アイヌの人々との交流についても肯定的な回答をするケースが過半数となっている。

表10－22　地域別に見た地域に対する評価とアイヌの人々との交流との関係

	誰でも自由にものが言える	住民のまとまりが強い	新しくきた人でもなじみやすい	日常的な付き合いが盛ん	近所の人たちとの交流	町内会活動への参加	昔からの文化･習慣を大事にする	昔から住んでいる人の意見が強い	新しいものを積極的に取り入れる	今後の居住希望
新ひだか	p＝.198	p＝.338	（－） p＜.01	（－） p＜.01	＋ p＜.001	＋ p＜.001	p＝.808	＋ p＜.1	－ p＜.1	＋ p＜.01
伊達	（－） p＜.01	p＝.768	p＝.822	（－） p＜.001	＋ p＜.001	（＋） p＜.001	p＝.305	p＝.430	p＝.263	p＝.230
白糠	－ p＜.1	p＝.293	p＝.199	－ p＜.001	（＋） p＜.001	＋ p＜.001	（－） p＜.01	p＝.753	－ p＜.01	＋ p＜.1
札幌	p＝.135	p＝.837	p＝.740	p＝.362	p＝.960	＋ p＜.1	p＝.442	？ p＜.05	p＝.176	p＝.741
むかわ	＋ p＜.001	p＝.621	＋ p＜.01	＋ p＜.01	＋ p＜.001	＋ p＜.001	p＝.265	？ p＜.05	＋ p＜.01	＋ p＜.001
合計	p＝.467	＋ p＜.05	？ p＜.01	＋ p＜.01	＋ p＜.001	＋ p＜.001	＋ p＜.01	（＋） p＜.001	（－） p＜.01	＋ p＜.05

注）1. 有意差を生じたところについて、それぞれの項目について肯定的回答になるほどアイヌの人々との交流が活発になっている場合は「＋」、否定的回答になるほどアイヌの人々との交流が活発になっている場合は「－」、明瞭な直線的な関係が見出されない場合は「?」を入れている。「今後の居住希望」については、「いまの場所にずっと住みたい」＞「別の場所に移りたい」＞「別の場所に移る予定がある」の順で肯定～否定の回答と把握している。また、「＋」や「－」の傾向が弱く見出される場合は（　）をつけている。

2. 検定はすべてχ^2検定。

資料：実態調査より。

表10－23　地域別・「町内会活動への参加」別に見たアイヌの人々との交流

		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	N
新ひだか	積極的に参加している	29.6	38.9	15.7	15.7	108
	ある程度参加している	26.9	35.0	19.2	18.8	234
	あまり参加していない	24.2	23.1	19.8	33.0	91
	まったく参加していない	13.3	13.3	14.7	58.7	75
	合計	25.0	30.5	17.9	26.6	508
伊達	積極的に参加している	16.4	16.4	16.4	50.7	67
	ある程度参加している	5.4	12.1	19.6	62.9	240
	あまり参加していない	1.9	3.9	14.2	80.0	155
	まったく参加していない	3.3	4.2	5.8	86.7	120
	合計	5.3	8.8	14.9	71.0	582
白糠	積極的に参加している	19.8	23.8	29.7	26.7	101
	ある程度参加している	9.5	26.8	26.3	37.4	179
	あまり参加していない	8.6	19.4	18.3	53.8	93
	まったく参加していない	4.9	7.3	22.0	65.9	41
	合計	11.4	22.5	24.9	41.3	414
札幌	積極的に参加している	-	9.1	4.5	86.4	22
	ある程度参加している	-	5.5	4.1	90.4	146
	あまり参加していない	1.7	1.1	6.8	90.3	176
	まったく参加していない	-	2.6	4.4	93.0	227
	合計	0.5	3.2	5.1	91.2	571
むかわ	積極的に参加している	51.9	27.8	13.0	7.4	108
	ある程度参加している	25.9	36.8	17.4	19.8	247
	あまり参加していない	10.3	29.9	23.4	36.4	107
	まったく参加していない	10.7	23.2	17.9	48.2	56
	合計	26.4	32.0	17.8	23.7	518
合計	積極的に参加している	29.3	26.8	18.0	25.9	406
	ある程度参加している	15.0	24.7	18.0	42.4	1046
	あまり参加していない	7.6	12.7	15.1	64.6	622
	まったく参加していない	4.2	7.1	9.1	79.6	519
	合計	13.3	18.6	15.5	52.6	2593

新ひだか：$p<.001$、伊達：$p<.05$、白糠：$p<.01$、札幌：$p<.05$、むかわ：$p<.001$、合計：$p<.001$（いずれも χ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

ただし、地域への評価や参加が肯定的・積極的であるほど、アイヌの人々との交流が盛んとなるという傾向は、この「町内会活動への参加」のほかは、「近所の人たちとの交流」、「今後の居住希望」など、全体としては少数である。むしろ、地域への評価や参加が否定的・消極的であるほど、アイヌの人々との交流が盛んとなる項目も見られる。

たとえば、表10－24に、「日常的な付き合いが盛ん」への評価とアイヌの人々との交流との関係をまとめた。これを見ると、むかわでは、「日常的な付き合いが盛ん」を肯定する人ほど、アイヌの人々との交流が活発となっている。これに対し、新ひだかや伊達、白糠では、基本的には、「日常的な付き合いが盛ん」だとは思わない人ほど、アイヌの人々との交流が活発になっている。このような傾向は、「誰でも自由にものが言える」や「新しくきた人でもなじみやすい」でも同様に見られる。むかわでは一貫して、地域への評価とアイヌの人々との交流の間には正の相関関係が見られるけれども、同様に活発なアイヌの人々との交流が確認される新ひだかを含め、他の地域では、むしろ負の相関関係が生じている。ここであげた項目をもとにすれば、アイヌの人々と活発に交流

している住民は、地域での生活に息苦しさを感じる傾向が強く、そういった地域の問題に気づくような感覚を持つがゆえに、アイヌの人々との交流をいとわないとも考えられる。

表10－24　地域別・「日常的な付き合いが盛ん」の評価別に見たアイヌの人々との交流

		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	N
新ひだか	とてもそう思う	15.0	40.0	－	45.0	20
	ある程度そう思う	20.9	29.1	19.1	30.9	230
	あまりそう思わない	27.9	32.6	18.1	21.4	215
	まったくそう思わない	52.9	17.6	17.6	11.8	17
	合計	24.9	30.7	17.8	26.6	482
伊達	とてもそう思う	6.9	6.9	3.4	82.8	29
	ある程度そう思う	1.9	7.0	14.0	77.1	258
	あまりそう思わない	6.6	10.7	17.6	65.2	244
	まったくそう思わない	25.9	14.8	18.5	40.7	27
	合計	5.4	9.0	15.2	70.4	558
白糠	とてもそう思う	－	－	9.1	90.9	11
	ある程度そう思う	9.4	18.8	20.0	51.9	160
	あまりそう思わない	12.5	24.5	29.0	34.0	200
	まったくそう思わない	16.0	32.0	28.0	24.0	25
	合計	11.1	22.0	24.7	42.2	396
札幌	とてもそう思う	－	11.8	－	88.2	17
	ある程度そう思う	－	4.7	6.7	88.7	150
	あまりそう思わない	0.7	2.3	5.3	91.7	300
	まったくそう思わない	1.1	2.1	3.2	93.6	94
	合計	0.5	3.2	5.2	91.1	561
むかわ	とてもそう思う	40.7	29.6	14.8	14.8	27
	ある程度そう思う	30.5	33.6	17.2	18.7	262
	あまりそう思わない	20.0	31.7	18.3	30.0	180
	まったくそう思わない	11.5	23.1	15.4	50.0	26
	合計	26.3	32.1	17.4	24.2	495
合計	とてもそう思う	15.4	19.2	5.8	59.6	104
	ある程度そう思う	14.0	19.8	15.8	50.5	1060
	あまりそう思わない	12.2	18.3	16.6	52.9	1139
	まったくそう思わない	12.7	12.2	11.6	63.5	189
	合計	13.1	18.5	15.4	52.9	2492

新ひだか：$p<.01$、伊達：$p<.001$、白糠：$p=.01$、札幌：p.362、むかわ：$p<.01$、合計：$p<.01$（いずれもχ^2検定）
注）1. 単位＝人、%。
　　2. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

一方、表10－17から、いま一度調査地域ごとの地域への評価・参加の状況を確認すると、むかわは、「新しいものを積極的に取り入れる」以外は、すべて肯定的評価が過半数となっている。この点で、もともとむかわの人々は、むかわという地域を高く評価しているといえる。また、そのようにむかわを高く評価する人々が、アイヌの人々との交流も積極的に行っているということになる。つまりは、地域への包摂度が高い人々のなかにアイヌの人々との交流も結びついていることを意味しており、むかわではアイヌの人々自体も、地域へ強く包摂されている可能性が高いと考えられる。これに対し、新ひだか、伊達、白糠では、地域への包摂度が低い人々がアイヌの人々との結びつきを強く持っている傾向が確認される。そのため、これらの地域では、アイヌの人々や、アイヌの人々と交流を持つ人々からなる地域への包摂度の低いグループと、このグループと対照的な地域への包摂度の高いグループとに分化される側面が存在する可能性を看取することができる。

第３節　地域の意識・行動から見たアイヌ語・アイヌ文化の保存に対する意識

続いて、アイヌ語やアイヌ文化の保存に対する意識について、地域の意識・行動との関連を検討する。ただし、新ひだか・伊達・白糠と、札幌・むかわで行った調査の項目が異なるため、ここでは同一の項目で調査を行った新ひだか・伊達・白糠の３地域の比較を行う。

まず、出身地・居住世代・居住年数と「アイヌ民族に関する施策はどうあるべきだと思いますか」と尋ねる質問（複数回答）で、「アイヌ語・アイヌ文化などを守るべきだと思う」に○をつけた者の関連を検討する。ここで有意差を生じたのは、出身地・居住世代・自身の居住年数であった。これらを表 10 － 25 にまとめる。

表10－25　地域別・居住関連項目別に見た「アイヌ語・アイヌ文化などを守るべきだと思う」者の状況

	出身地		居住世代		自身の居住年数	
新ひだか	同一市町内	103（38.0）	自分の代	65（37.6）	20年未満	33（36.7）
	北海道内の他市町村	71（35.5）	親の代	43（38.1）	20～40年未満	29（36.3）
	道外	21（41.2）	祖父母の代	59（44.4）	40～60年未満	33（37.9）
			祖父母より前	23（29.5）	60年以上	7（35.0）
	合計	195（37.4）	合計	190（38.2）	合計	102（36.8）
	有意確率	p＝.718	有意確率	p＝.197	有意確率	p＝.993
伊達	同一市町内	87（42.6）	自分の代	133（51.2）	20年未満	77（56.2）
	北海道内の他市町村	157（48.3）	親の代	61（49.6）	20～40年未満	50（47.2）
	道外	28（47.5）	祖父母の代	30（31.3）	40～60年未満	39（42.9）
			祖父母より前	38（44.2）	60年以上	10（33.3）
	合計	272（46.3）	合計	262（46.4）	合計	176（48.4）
	有意確率	p＝.438	有意確率	p＜.01	有意確率	p＜.1
白糠	同一市町内	93（45.1）	自分の代	48（39.7）	20年未満	18（40.0）
	北海道内の他市町村	68（37.8）	親の代	54（41.2）	20～40年未満	31（44.3）
	道外	23（63.9）	祖父母の代	60（49.2）	40～60年未満	35（44.3）
			祖父母より前	19（43.8）	60年以上	13（41.9）
	合計	184（43.6）	合計	181（43.8）	合計	97（47.1）
	有意確率	p＜.05	有意確率	p＝.390	有意確率	p＝.964
合計	同一市町内	283（41.6）	自分の代	246（44.4）	20年未満	128（47.1）
	北海道内の他市町村	296（42.0）	親の代	158（43.1）	20～40年未満	110（43.0）
	道外	72（42.0）	祖父母の代	149（42.5）	40～60年未満	107（41.6）
			祖父母より前	80（39.4）	60年以上	30（37.0）
	合計	651（49.3）	合計	633（42.9）	合計	375（43.3）
	有意確率	p＝.212	有意確率	p＝.670	有意確率	p＝.367

注）1. 今後のアイヌ施策として、「アイヌ語・アイヌ文化などを守るべきだと思う」を選んだ者の人数と割合を示した。
2. 単位＝人、%。
3. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

それぞれ一地域ずつで弱い有意差を生じているにすぎないが、出身地については、白糠で、道外出身者が「アイヌ語・アイヌ文化などを守るべきだと思う」と考える傾向が強い。居住世代については、伊達で、「自分の代」や「親の代」など、比較的最近の居住世代で、アイヌ語・アイヌ文化の保存に賛同する者が多い。この傾向は、自身の居住年数ではさらに明瞭になり、同じく伊達では、居住年数が短いほど、アイヌ語･アイヌ文化の保存をすべきと考える者が多くなる。このことから、現住地への根づきが浅い人々ほど、アイヌ語･アイヌ文化の保存に賛意を示しやすいことがわかる。ただし、新ひだかではまったく有意差は存在しておらず、居住関連の説明力はあまり強くないことには留意すべきである。

一方、地域への評価や地域での行動と、アイヌ語・アイヌ文化の保存をめぐる意識との間には、一定の関係が存在している。地域への評価や地域での行動と、アイヌ語・アイヌ文化の保存の意識との関連を検討し、有意差が生じた状況を表10－26にまとめた。これを見ると、いくつかの項目で有意差を生じていることがわかる。ただし、その関係のあり方については、すべてが「－」、つまり、地域への評価や地域での行動が否定的・消極的である者ほど、アイヌ語・アイヌ文化の保存に賛同しやすくなる状況が見出される。

表10－26　地域別に見た地域への評価・行動と「アイヌ語・アイヌ文化などを守るべきだと思う」者の関連

	誰でも自由にものが言える	住民のまとまりが強い	新しくきた人でもなじみやすい	日常的な付き合いが盛ん	近所の人たちとの交流	町内会活動への参加	昔からの文化･習慣を大事にする	昔から住んでいる人の意見が強い	新しいものを積極的に取り入れる	今後の居住希望
新ひだか	p＝.133	－ p＜.05	p＝.674	－ p＜.01	（－） p＜.1	p＝.294	－ p＜.01	p＝.215	－ p＜.05	p＝.485
伊達	p＝.582	p＝.794	p＝.262	p＝.714	p＝.510	p＝.870	－ p＜.1	p＝.946	－ p＜.1	p＝.163
白糠	p＝.616	－ p＜.1	p＝.199	（－） p＜.05	p＝.489	p＝.480	（－） p＜.05	p＝.502	p＝.578	p＝.976
合計	p＝.167	－ p＜.05	－ p＜.05	－ p＜.01	p＝.146	p＝.522	－ p＜.001	p＝.838	－ p＜.01	p＝.425

注）1. 有意差を生じたところについて、それぞれの項目について肯定的回答になるほど「アイヌ語･アイヌ文化などを守るべきだと思う」を選んだ者が多くなっている場合は「＋」、否定的回答になるほど「アイヌ語･アイヌ文化などを守るべきだと思う」を選んだ者が多くなっている場合は「－」を入れている。また、「＋」や「－」の傾向が弱く見出される場合は（　）をつけている。
2. 検定はすべてχ^2検定。
資料：実態調査より。

たとえば、すべての地域で有意差を生じた「昔からの文化・習慣を大事にする」と、２つの地域で有意差を生じた「日常的な付き合いが盛ん」との関連を、表10－27にまとめた。ここでも確認できるように、いずれも「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と回答する者ほど、アイヌ語・アイヌ文化の保存を挙げる者が多くなっている。

項目を具体的に検討すると、「昔からの文化・習慣を大事にする」については、アイヌ文化を含めた「昔からの文化」が大事にされていないがゆえに、アイヌ文化も保存されるべきだと考える者が存在することを示すとも捉えられる[3)]。ただし、日常的な付き合いについても、これが消極的な状況になっていると感じている者ほどアイヌ語・アイヌ文化の保存に賛意を示すことは、前節でも見出されたように、地域への包摂度が弱い、地域における「マイノリティ」を自認する人々ほど、アイヌ語・アイヌ文化に理解が深いものと捉えられる。逆にいえば、地域への包摂度の高い、地域の「マジョリティ」[4)]ほど、アイヌ語・アイヌ文化の保存についての関心が、相対的に低くなりやすいとも考えられる。

表10－27　地域別・「昔からの文化・習慣を大事にする」「日常的な付き合いが盛ん」をめぐる意識別に見た「アイヌ語・アイヌ文化などを守るべきだと思う」者の状況

	昔からの文化・習慣を大事にする		日常的な付き合いが盛ん	
新ひだか	とてもそう思う	6（20.0）	とてもそう思う	6（30.0）
	ある程度そう思う	65（32.7）	ある程度そう思う	72（30.6）
	あまりそう思わない	90（41.3）	あまりそう思わない	100（45.7）
	まったくそう思わない	24（57.1）	まったくそう思わない	8（47.1）
	合計	185（37.8）	合計	186（37.9）
	有意確率	p＜.01	有意確率	p＜.01
伊達	とてもそう思う	4（28.6）	とてもそう思う	11（37.9）
	ある程度そう思う	60（42.6）	ある程度そう思う	125（47.9）
	あまりそう思わない	152（47.2）	あまりそう思わない	113（46.1）
	まったくそう思わない	49（57.6）	まったくそう思わない	14（51.9）
	合計	265（47.2）	合計	263（46.8）
	有意確率	p＜.1	有意確率	p＝.714
白糠	とてもそう思う	2（33.3）	とてもそう思う	3（27.3）
	ある程度そう思う	45（32.8）	ある程度そう思う	55（34.4）
	あまりそう思わない	101（48.6）	あまりそう思わない	103（50.5）
	まったくそう思わない	25（50.0）	まったくそう思わない	12（48.0）
	合計	173（43.1）	合計	173（43.3）
	有意確率	p＜.05	有意確率	p＜.05
合計	とてもそう思う	12（24.0）	とてもそう思う	20（33.3）
	ある程度そう思う	170（35.6）	ある程度そう思う	252（38.4）
	あまりそう思わない	343（45.9）	あまりそう思わない	316（47.3）
	まったくそう思わない	98（55.4）	まったくそう思わない	34（49.3）
	合計	623（42.9）	合計	622（42.8）
	有意確率	p＜.001	有意確率	p＜.01

注）1. 今後のアイヌ施策として、「アイヌ語・アイヌ文化などを守るべきだと思う」を選んだ者の人数と割合を示した。
2. 単位＝人、%。
3. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

第４節　地域の意識・行動から見たアイヌ民族への経済的援助に対する意識

次に、アイヌへの経済的援助に対する意識と、地域への意識・行動との関連を検討してみたい。

まず、居住をめぐる変数については、出身地、居住世代、家族の居住年数、自身の居住年数のいずれも有意差を生じなかった。

続いて、地域の意識・行動と、今後のアイヌ施策として「アイヌ民族に対する経済的な援助を拡充すべき」を挙げたものとの関連を検討した際の有意確率と、そこでの関連のあり方を表10－28に掲げた。ここからは、表10－26で確認したアイヌ語・アイヌ文化の保存をめぐる意識に関わって見られたような明瞭な関係はうかがえない。特に、明確な直線的関係が見出されなかった「？」を付した項目が多くなっている。

表10－28　地域別に見た地域への評価・行動と「アイヌ民族に対する経済的な援助をすべきだと思う」者の関連

	誰でも自由にものが言える	住民のまとまりが強い	新しくきた人でもなじみやすい	日常的な付き合いが盛ん	近所の人たちとの交流	町内会活動への参加	昔からの文化･習慣を大事にする	昔から住んでいる人の意見が強い	新しいものを積極的に取り入れる	今後の居住希望
新ひだか	? p＜.01	(－) p＜.01	p＝.316	? p＜.01	p＝.677	p＝.287	? p＜.01	p＝.931	p＝.230	p＝.857
伊達	? p＜.05	－ p＜.01	(－) p＜.05	p＝.127	(＋) p＜.001	(＋) p＜.01	? p＜.001	(＋) p＜.05	(－) p＜.01	p＝.237
白糠	(－) p＜.05	p＝.220	p＝.126	p＝.285	p＝.399	p＝.529	? p＜.01	p＝.216	(－) p＜.01	p＝.194
合計	? p＜.001	－ p＜.001	? p＜.01	? p＜.05	(＋) p＜.001	(＋) p＜.05	? p＜.001	(－) p＜.05	(－) p＜.001	p＝.495

注）1. 有意差を生じたところについて、それぞれの項目について肯定的回答になるほど「アイヌ民族に対する経済的な援助をすべきだと思う」を選んだ者が多くなっている場合は「＋」、否定的回答になるほど「アイヌ民族に対する経済的な援助をすべきだと思う」を選んだ者が多くなっている場合は「－」、明瞭な直線的な関係が見出されない場合は「？」を入れている。また、「＋」や「－」の傾向が弱く見出される場合は（　）をつけている。
2. 検定はすべてχ^2検定。
資料：実態調査より。

そこで、地域の意識･行動との関連の典型的なパターンを表 10 － 29 にまとめた。まず、左の「誰でも自由にものが言える」については、表 10 － 28 で白糠以外に「？」を付している。ここからわかるように、「誰でも自由にものが言える」については、「とてもそう思う」と「まったくそう思わない」という両極で、アイヌ民族への経済的援助に賛意を示す者が多く、中間的な回答をしている者では、賛意を示す割合が低くなっている。「新しく来た人でもなじみやすい」「日常的な付き合いが盛ん」「昔からの文化・習慣を大事にする」も、同様の傾向を示している。

これに対し、「住民のまとまりが強い」や「新しいものを積極的に取り入れる」では、これらについての否定的な回答をする者ほど、アイヌに対する経済的援助を重視している。さらに、「近所の人たちとの交流」「町内会活動への参加」については、これらが積極的である場合に、アイヌ民族への経済的援助が肯定されやすい。

これらの全体的な状況をふまえると、「近所の人たちとの交流」や「町内会活動への参加」など、実際の地域での行動については、これが積極的であるほどアイヌ民族への経済的援助が必要だと考えているといえる。これは、地域での活動や交流に参加しようという意識が高いと、アイヌの人々の経済的問題にも敏感になりやすいことを示すものと考えられる。また、「住民のまとまりが強い」や「新しいものを積極的に取り入れる」などについては、地域に対する問題意識に注目する人ほど、アイヌ民族が抱える経済問題にも気づきやすい傾向があるものと受けとめられる。

さらに、「誰でも自由にものが言える」など、強い肯定をする者と、強い否定をする者とがアイヌ民族への経済的援助を重視しやすい項目については、逆にいえば、弱い肯定・弱い否定という中間的な回答をしている者で経済的援助も重視していないことを示している。その点では、地域の意識や行動が曖昧である者の場合、アイヌ民族への経済的援助についても曖昧な意識となりやすいことを示しているとも捉えられる。ただし、いずれも結果をバラバラに解釈する側面が強く、有用な説明にはなっていない。この点の解明は、そもそもアイヌ民族への経済的援助を肯定する者が少ないこともあり、その点でも検討の困難さが生じるため、今後の課題としたい。ただし、確認すべきは、２節で確認したアイヌの人々との交流や、３節で確認したアイヌ語・アイヌ文化の保存をめぐ

る状況のように、地域の「マイノリティ」が、交流や保存に賛同しやすいという明瞭な関係は経済的援助では見られず、むしろ、近所の人や町内会活動など、実際に地域と触れ合う機会を持つ者の方が、経済的援助を重視しやすいということであろう。

表10－29　地域別・「誰でも自由にものが言える」「住民のまとまりが強い」「近所の人たちとの交流」をめぐる意識別に見た「アイヌ民族に対する経済的な援助をすべきだと思う」者の状況

	誰でも自由にものが言える		住民のまとまりが強い		近所の人たちとの交流	
新ひだか	とてもそう思う	4（13.8）	とてもそう思う	1（3.1）	互いの家をよく行き来する	4（7.8）
	ある程度そう思う	14（6.4）	ある程度そう思う	15（6.5）	会った際に世間話をする	13（5.9）
	あまりそう思わない	8（3.7）	あまりそう思わない	12（5.7）	道で会えばあいさつをかわす程度	14（6.4）
	まったくそう思わない	6（21.4）	まったくそう思わない	5（29.4）	近所の住民と付き合いはない	3（12.0）
	合計	32（6.5）	合計	33（6.7）	合計	34（6.6）
	有意確率	p＜.01	有意確率	p＜.01	有意確率	p＝.677
伊達	とてもそう思う	4（12.5）	とてもそう思う	—	互いの家をよく行き来する	12（23.5）
	ある程度そう思う	12（4.4）	ある程度そう思う	7（3.7）	会った際に世間話をする	15（6.8）
	あまりそう思わない	19（8.4）	あまりそう思わない	26（8.4）	道で会えばあいさつをかわす程度	14（4.8）
	まったくそう思わない	5（16.7）	まったくそう思わない	8（17.4）	近所の住民と付き合いはない	2（10.5）
	合計	40（7.2）	合計	41（7.3）	合計	43（7.4）
	有意確率	p＜.05	有意確率	p＜.01	有意確率	p＜.001
白糠	とてもそう思う	—	とてもそう思う	1（11.1）	互いの家をよく行き来する	4（10.3）
	ある程度そう思う	10（5.5）	ある程度そう思う	4（2.4）	会った際に世間話をする	8（4.6）
	あまりそう思わない	5（2.8）	あまりそう思わない	11（5.2）	道で会えばあいさつをかわす程度	7（3.8）
	まったくそう思わない	3（15.0）	まったくそう思わない	2（10.5）	近所の住民と付き合いはない	1（6.3）
	合計	18（4.5）	合計	18（4.4）	合計	20（4.9）
	有意確率	p＜.05	有意確率	p＝.220	有意確率	p＝.399
合計	とてもそう思う	8（9.4）	とてもそう思う	2（3.8）	互いの家をよく行き来する	20（14.2）
	ある程度そう思う	36（5.4）	ある程度そう思う	26（4.4）	会った際に世間話をする	36（5.9）
	あまりそう思わない	32（5.2）	あまりそう思わない	49（6.7）	道で会えばあいさつをかわす程度	35（5.1）
	まったくそう思わない	14（17.9）	まったくそう思わない	15（18.3）	近所の住民と付き合いはない	6（10.0）
	合計	90（6.2）	合計	92（6.3）	合計	97（6.4）
	有意確率	p＜.001	有意確率	p＜.001	有意確率	p＜.001

注）1. 今後のアイヌ施策として、「アイヌ民族に対する経済的な援助をすべきだと思う」を選んだ者の人数と割合を示した。
2. 単位＝人、%。
3. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

第５節　地域の意識・行動から見たアイヌ民族への教育支援に対する意識

さらに続いて、地域の意識・行動と、アイヌ民族への教育支援に対する意識との関係を確認してみたい。

まず、出身地や居住歴に関する項目との関連を見ると、地域別のクロス集計ではいずれも有意差は生じておらず、出身地と居住世代の「合計」の部分で弱い有意差が確認された（いずれも χ^2 検定で、p<.1）。出身地については、「道外」（アイヌ施策として「アイヌ民族に対する教育支援を拡充すべきだと思う」と回答した者が19人（13.0%））＞「北海道内の他市町村」（同63人（8.9%））＞「同一市町内」（49人（7.2%））の順にアイヌ民族への教育支援に賛意を示す者が多かった。居住世代では「自分の代」（同56人（10.1%））＞「祖父母より前」（19人（9.4%）＞「親の代」（29人（7.9%））＞「祖父母の代」（19人（5.4%））と、両極でアイヌ民族への教育支援を肯定する者が、やや多くなっていた。ただし、いずれもそれほど明瞭な関係が生じていたわけではない。

次に、地域の評価・行動とアイヌ民族への教育支援に関する意識の関連を表10－30にまとめた。

これを見ると、基本的には負の相関が見られるか、もしくは明瞭な関係が見出されないかのいずれかになっている。

表10－30　地域別にみた地域への評価・行動と「アイヌ民族に対する教育支援を拡充すべきだと思う」者の関連

	誰でも自由にものが言える	住民のまとまりが強い	新しくきた人でもなじみやすい	日常的な付き合いが盛ん	近所の人たちとの交流	町内会活動への参加	昔からの文化･習慣を大事にする	昔から住んでいる人の意見が強い	新しいものを積極的に取り入れる	今後の居住希望
新ひだか	(－) p＜.05	－ p＜.05	p＝.654	? p＜.1	(＋) p＜.1	p＝.615	－ p＜.01	p＝.159	－ p＜.1	p＝.789
伊達	(－) p＜.1	p＝.309	p＝.374	? p＜.1	p＝.222	p＝.182	p＝.556	p＝.564	(－) p＜.05	p＝.167
白糠	p＝.424	? p＜.001	p＝.367	p＝.220	－ p＜.1	p＝.834	p＝.155	p＝.331	(－) p＜.01	p＝.321
合計	(－) p＜.01	? p＜.01	p＝.177	? p＜.05	(＋) p＜.1	p＝.327	(－) p＜.01	p＝.122	(－) p＜.001	p＝.657

注）1. 有意差を生じたところについて、それぞれの項目について肯定的回答になるほど「アイヌ民族に対する教育支援を拡充すべきだと思う」を選んだ者が多くなっている場合は「＋」、否定的回答になるほど「アイヌ民族に対する教育支援を拡充すべきだと思う」を選んだ者が多くなっている場合は「－」、明瞭な直線的な関係が見出されない場合は「？」を入れている。また、「＋」や「－」の傾向が弱く見出される場合は（　）をつけている。
2. 検定はすべてχ^2検定。
資料：実態調査より。

たとえば、表10－31の「誰でも自由にものが言える」との関係を見ると、否定的回答をしている者ほどアイヌ民族への教育支援には賛成しやすい状況が見られる。一方、同じ表10－31の「住民のまとまりが強い」については、新ひだかでは負の相関が強く見られるけれども、白糠では両端の考えを持つ者が、アイヌ民族への教育支援を肯定している。これに対し、「近所の人たちとの交流」のように、積極的な関わりをしている者がアイヌ民族への教育支援を肯定するケースもあるが、全体としては、このような関連はあまり見られていない。

また、表10－31で取り上げた3項目は、アイヌ民族への経済的支援をめぐる意識をまとめた表10－29と同じものであるけれども、「近所の人たちとの交流」が正の相関を示す点では共通だが、他の二項目は、経済的支援と教育支援とで異なる回答傾向をみせている。この点で、アイヌ民族に関わる支援と一口にいっても、言語・文化と、経済、教育のそれぞれのイシューによって、地域への意識や行動が及ぼす影響のあり方は多様であることがわかる。

ただし、経済と教育で1つの共通点を見出すとすれば、近所の人たちとの交流という具体的な住民同士の関わりが、アイヌ民族への経済面・教育面での支援の重要性を感じさせやすいということである。この点で、言語や文化は地域への包摂度の低い人々が共感しやすいのに対し、経済や教育といった生活に密着した部分は、普段から近隣の人付き合いなど交流を図っている住民の方が捉えやすいことを示しているとも考えられる。

それでは、ここまで見てきた地域差をより深く検討するために、住民への聞き取りデータによって、各地域におけるアイヌの人々をめぐる状況について探っていきたい。なお、札幌･むかわでは、一般住民への聞き取り調査は行っていないので、ここでは新ひだか･伊達･白糠の3地域を見ていく。

表10－31　地域別・「誰でも自由にものが言える」「住民のまとまりが強い」「近所の人たちとの交流」をめぐる意識別に見た「アイヌ民族に対する教育支援を拡充すべきだと思う」者の状況

	誰でも自由にものが言える		住民のまとまりが強い		近所の人たちとの交流	
新ひだか	とてもそう思う	3（10.3）	とてもそう思う	1（3.1）	互いの家をよく行き来する	3（12.0）
	ある程度そう思う	19（8.7）	ある程度そう思う	20（8.7）	会った際に世間話をする	15（6.9）
	あまりそう思わない	18（8.4）	あまりそう思わない	22（10.5）	道で会えばあいさつをかわす程度	23（10.4）
	まったくそう思わない	7（25.0）	まったくそう思わない	5（29.4）	近所の住民と付き合いはない	10（19.6）
	合計	47（25.0）	合計	48（9.8）	合計	51（9.9）
	有意確率	p＜.05	有意確率	p＜.05	有意確率	p＜.1
伊達	とてもそう思う	3（9.4）	とてもそう思う	2（18.2）	互いの家をよく行き来する	1（5.3）
	ある程度そう思う	17（6.3）	ある程度そう思う	15（7.9）	会った際に世間話をする	21（7.2）
	あまりそう思わない	22（9.7）	あまりそう思わない	27（8.7）	道で会えばあいさつをかわす程度	21（9.6）
	まったくそう思わない	6（20.0）	まったくそう思わない	7（15.2）	近所の住民と付き合いはない	8（15.7）
	合計	48（8.6）	合計	51（9.1）	合計	51（8.8）
	有意確率	p＜.1	有意確率	p＝.309	有意確率	p＝.222
白糠	とてもそう思う	1（4.2）	とてもそう思う	4（44.4）	互いの家をよく行き来する	3（18.8）
	ある程度そう思う	12（6.6）	ある程度そう思う	7（4.3）	会った際に世間話をする	15（8.2）
	あまりそう思わない	10（5.7）	あまりそう思わない	11（5.2）	道で会えばあいさつをかわす程度	7（4.0）
	まったくそう思わない	3（15.0）	まったくそう思わない	4（21.1）	近所の住民と付き合いはない	1（2.6）
	合計	26（6.5）	合計	26（6.4）	合計	26（6.3）
	有意確率	p＝.424	有意確率	p＜.001	有意確率	p＜.1
合計	とてもそう思う	7（8.2）	とてもそう思う	7（13.5）	互いの家をよく行き来する	7（11.7）
	ある程度そう思う	48（7.2）	ある程度そう思う	42（7.2）	会った際に世間話をする	51（7.4）
	あまりそう思わない	50（8.1）	あまりそう思わない	60（8.2）	道で会えばあいさつをかわす程度	51（8.3）
	まったくそう思わない	16（20.5）	まったくそう思わない	16（19.5）	近所の住民と付き合いはない	19（13.5）
	合計	121（8.4）	合計	125（8.6）	合計	128（8.5）
	有意確率	p＜.01	有意確率	p＜.01	有意確率	p＜.1

注）1. 今後のアイヌ施策として、「アイヌ民族に対する教育支援を拡充すべきだと思う」を選んだ者の人数と割合を示した。
2. 単位＝人、%。
3. 不明・無回答を除く。
資料：実態調査より。

第６節　一般住民から見たアイヌの人々をめぐる状況

第１項　新ひだかにおけるアイヌの人々をめぐる状況

新ひだか町でまずあげられることは、アイヌの人々との接点を持つ住民が多いということである。「アイヌ部落っていうか、■■（地名）でも、アイヌじゃない人もいるんだけど、アイヌが住む土地が決められていた」（壮年・女性）とあるように、「アイヌ部落」にアイヌの人々は集まって暮らす形態となっていたようである。この「アイヌ部落」のそばに暮らしていたという人は少なくない。そのため、「１学年で90人中８人いたのは記憶にある」（老年・男性）、「同級生が半分アイヌ」（壮年・女性）など、地域や年代によって差異はあるが、学校時代にアイヌの同級生がいたことを語る住民は少なくない。

また、アイヌの人々は、集住している地域の地名にちなんだ名字を名乗っているため、名字でアイヌ民族であることがわかると語る住民も少なくない。さらに、毎年９月に行われるシャクシャイン法要祭に出向く住民も多く、この祭りで販売される鮭の串焼きを「それはアキアジを炭火で焼くんですよ。串に刺して、焼くの。おいしそうでしょ」（老年・女性）と紹介してくれる住民もいた。この点で、新ひだかのアイヌの人々は可視性が高いといえる。

可視性の高さと、一般住民とアイヌ住民との交流を促す１つの背景として、社会経済的基盤を持

つアイヌの人々が少なからず存在したことが指摘できる。たとえば、「ここは酋長クラスがけっこうおったから」（老年・男性）アイヌの人々への差別がなかったという語りが聞かれた。また、地元の建設会社の経営者がアイヌの人であることを指摘する住民もいた。このように、一定の社会経済的基盤を有するアイヌの人々の存在が、アイヌの人々への差別的取り扱いを緩和していると捉える見方がある。

ただし、アイヌの人々の可視性は、アイヌの人々への恐怖心を抱かせることにもなっている。たとえば、アイヌの人の家に養子に出されることについて、次のような語りが聞かれた。

家内も私もだけど、私は父親の顔を知らないんですよ。３歳と１か月の時に父に死なれて。母親がもし倒れたら、アイヌの人にもらわれるという恐怖心がずっとありました。小学校２年生くらいまではそう思っていました。……また、うちはたくさんアイヌの人が来て、うちは母親１人で農家やっていたから。「いつでももらってくぞ」というようなことをいうんだもんな。怖いんでないんだよ。みんなその、可愛がってくれて。やっぱり、心のなかでは差別していたんだべな。小さいけど、アイヌにもらわれるのは嫌だっていう。（老年・男性）

このように、根底の部分ではアイヌの人々への差別意識の存在も見出されるけれども、それだけアイヌの人々と一般住民との生活が近接したところにあったことをうかがうことができる。

第２項　伊達におけるアイヌの人々をめぐる状況

伊達におけるアイヌの人々をめぐる状況としてあげられるのは、何人かのキーパーソンが念頭に置かれていることである。たとえば、アイヌの人々にキリスト教を広めようと布教活動を行ったジョン・バチェラー、有珠地区の有力なアイヌの酋長であった向井富蔵の娘で、バチェラーの養女に迎えられたバチェラー八重子（掛川 1988）、さらにそのバチェラー八重子と親しく交流し、アイヌの人々の写真を数多く発表した元伊達高校教諭の掛川源一郎、伊達市噴火湾文化研究所所長で、伊達のアイヌ文化の研究にも携わっている大島直行らである。かれらの活動を念頭に、伊達のアイヌのことを想起する住民は少なくなかった。

とくに、老年層では、バチェラー八重子が開いていた「日曜学校」について、次のように思い出を語る住民もいた。

私は小学校入学前から行き、小学校時代はずっと向井八重子さん（バチェラー八重子）が自宅で開いていた日曜学校に通った。勉強のほか昔の四方山話やアイヌの生活について八重子さんが直接教えてくれた。その頃は日曜学校くらいしか楽しみがなかった。アイヌも和人も区別なく近所の子どもは通っていた。小さい時だから人数ははっきり覚えていないが 20 人くらいは来ていたと思う。クリスマスになると、バチェラー会館でクリスマスイブ、クリスマス会を開いてくれた。ピアノが会館にあったので、八重子さんの姪がピアノを演奏してくれた。私は終戦後までは通っていた。日曜学校は終戦後も八重子さんが生きている間[5)]はやっていたと思う。（老年･男性，聞き取りを再構成したもの）

有珠にバチェラー会館があり、そこはアイヌの子どもたちを集めて、日曜学校を開いていた。布教をしていたのかもしれない。あの辺りはアイヌが多い。向井さんというアイヌの酋長の家の娘の八重子さんをバチェラーさんは養女にして、そこで布教をしていた。日曜学校は、今はもうやっていない。掛川源一郎さんがよく写真を写しに行っていた。八重子さんの大きなお墓がある。（老年・男性，聞き取りを再構成したもの）

また、伊達は、亘理伊達家の家臣団が集団移住を行った地である。この移住の過程で、「第１回移住団の家ができるまでの間、有珠地区の住居や小屋に泊めてもらう等、アイヌの人々から心づくしを受けた。一方、移住団では、アイヌの人々に対して、常に礼節を重んじること、だましたり彼らの馬を無断で使用したりしないこと、そして住宅にみだりに立ち入ってはいけないことなどの規則をつくり、家臣らも忠実にそれを守った」（小内 2014：5）。その点で、伊達では、開拓者とアイヌの人々との、ある種「平和的」（大黒 1998）な関係が形成されていた。そのことと通じる部分をもつと思われるのが、次の葬式をめぐる「契約会」の存在である。

お葬式は 20 ～ 30 人の仲間でつくった契約会が、自分たちで組織してお葬式をしている。今でもそのしきたりがある。100 年くらい続いている契約会もある。阿波衆、仙台衆など、よそから入って来ているから、助け合って自分たちのことは自分たちで行う気持ちがあったのだと思う。町内会とも違い、隣近所ではなくて、先祖の出身地が同じといったつながりなどで集まっている。いろいろな人が混じっていて、アイヌの人も入り、関係なくやっている。契約会をつくった最初からアイヌの人と一緒にやっている。アイヌの人との隔てはない。特別争いもない。宗派もいろいろだった。お葬式はそこの家の宗教に応じてやっていた。四華花まで契約会でつくった。薪を積んで自分たちで火葬もしていた。

その家の親が亡くなったら、息子が入るというように、家で代々受け継がれている。私の入っている契約会はつくったときは 30 ～ 50 世帯ぐらいあったが、今は 20 世帯くらい。多いところだと 100 世帯くらいあった。契約会を辞める人もたくさん出てきている。浜のほうのアイヌの人たちも入っている。浜のほうの人たちはけっこう辞めている人が多いかもしれない。

契約会に入るのに特別な条件はない。気があえば「入るかい？」といって、入りたい人がいるけれどと、紹介してみんなが認めれば入る。今若い人は入っていない。アイヌの人でも和人でも、みんな一緒で仲がいい人が入って契約会をつくっている。会費は月 500 円。１年では 6,000 円。

お葬式では、契約会がお通夜のことから全部のことをやる。冠婚葬祭の他、火事になったときなども助け合う。主にお葬式が多い。

伊達では有珠の他の地域にもあると思うがよくわからない。解散してしまったところもある。有珠では年配の人はどこかの契約会に入っている。若い人は入らない。（老年・男性，聞き取りを再構成したもの）

このように、有珠地区には少なくとも、葬儀の運営に関わる「契約会」という組織が存在し、そこには和人やアイヌといった区別なくメンバーが集っていることがわかる。このことも、和人とアイヌが「平和的」な関係を形成してきたことの一例と捉えられるだろう。

また、伊達のアイヌ民族については、1970年代に生じた伊達火力発電所建設反対運動の存在もあげられる。この運動に関わった経験のある住民は、その状況を以下のように説明している。

伊達火力発電の運動は1970（昭和45）年頃から、火力発電所の建設の噂が出てきて、1972（昭和47）年頃が真っ盛りだったかもしれない。公害問題で大騒ぎした。

反対運動では条件付き反対派と反対派に分かれていた。アイヌは強硬派で和人はそうではなかった。強硬派には外部から人が入ってきた。経験者や大学生も入ってきて、反対する人たちが集まって来た。

私は、組合のことをよく知っていて、同じ反対しても条件付きにしなければ、いつまで反対していてもだめだと思った。ある程度ものを知らなければならないし、反対ばっかりが能ではないということを組合のことをしていて知った。以前働いていた会社も大きい組合があった。組合でも条件付き派と反対派がいたから何回も総会が開かれた。1974（昭和49）年頃、伊達市もある程度決めるために話し合わなければならなかった。私の父は役員をやっていたので、道庁まで行ったこともあった。札幌に詰めて交渉していた。（老年・男性，聞き取りを再構成したもの）

このように、同じ建設反対であっても、アイヌの人々や、地域外の支援者は強硬に建設反対を唱え、和人住民は条件付き反対を主張していたという立場の違いが見られる。最終的には発電所は建設されることになったが、運動についてはいくつかの記録が残されることとなった[6)]。

ただし、有珠地区以外では、アイヌの人々の存在を日常的に感じる機会はほとんどないようである。そのため、地域の柱の１つとしてアイヌを位置づけるほどの動きにはなっていない。このことは、「伊達市は伊達政宗については一生懸命やっているけれど、アイヌに対する取り組みについては聞いたことがない。古い人たちはアイヌに対する抵抗感があるんじゃないかと思う」（老年・女性）という声からも裏づけられる。

第３項　白糠におけるアイヌの人々をめぐる状況

白糠におけるアイヌの人々をめぐる状況についても、やはりキーパーソンの名前があがってくる。一人は、アイヌ民族への理解が深く、アイヌ文化をまちづくりの土台に据えるという路線を敷いたＡ元町長である。そしてもう一人は、白糠アイヌ文化保存会を率い、音楽や踊り、言葉や料理などのアイヌ文化の伝承につとめているＢ氏である。

たとえば、Ｂ氏の活動については、「アイヌ協会の白糠支部とアイヌ文化保存会で活動ができてるし、うちは保存会と町の方の教育委員会を通して台湾の先住民族とかとも交流したりしてるから、結構いい活動はしてるんじゃないかな」（壮年・男性）、「積極的に白糠町は取り組んでいると思います。小学校中学校でアイヌのその特別活動のなかでやっているからね。その名称は変わったけど、アイヌ協会の人たち、アイヌ文化保存会ということになるけど、その人たちが一生懸命頑張ってくれてるので」（老年・男性）などといった声が聞かれた。白糠では、アイヌ三大祭りや、小中学校でのアイヌ文化学習[7)]が実施されている。これらの場面でアイヌ文化保存会が活動していることは、比較的広く認知されていることがうかがえる。

ただし、2007（平成19）年を「しらぬかアイヌ文化年」にしたり、アイヌ三大祭りを実施した

りしている割には、白糠の人々のアイヌ民族との接点はそれほど多く聞かれなかった。白糠のアイヌ三大祭りは、新ひだかのシャクシャイン法要祭などと異なり、儀式の側面が強く、一般の人々には敷居の高さを感じさせる（新藤 2015b）ことも影響していると思われる。

これらの地域の状況を比較すると、新ひだかはアイヌの人々の状況が相対的に広く認識されているけれども、逆に白糠では、アイヌの文化活動は知られつつも、アイヌの人々や文化はあまり身近なものと感じられていないことが把握できる。一方、伊達では、有珠地区の住民など関わりがある人々においては「平和的」な関係となっており、思い出も多く語られるけれども、有珠地区以外の住民ではあまり関わりが見られないというアイヌの人々との関わりの差が見出される。

まとめ――地域づくりとパラレルに高まるアイヌとの交流・意識

最後に、本章を通じて明らかになった点をまとめたい。

第１に、地域の意識・行動を確認すると、むかわではほぼすべての項目が積極的に評価されていた。これに対し、むかわ以外の地域では、消極的な評価が過半数となる項目がいくつか見られており、一定の否定的評価がなされていることが明らかとなった。

第２に、これらの地域の意識・行動とアイヌの人々との交流やアイヌをめぐる意識の間には一定の関連が見られた。とくに、アイヌの人々との交流やアイヌ語・アイヌ文化の保存については、むかわでは、地域の意識・行動との間に正の相関が見られた。これに対し、むかわ以外の地域では、むしろ地域の意識･行動がネガティブであるほど、アイヌの人々との交流が活発になり、アイヌ語･アイヌ文化の保存に賛意を示すようになるという傾向が見出された。このことは、１点目と関連させれば、住民の地域の評価が高く、地域での行動が積極的なものが過半数である地域では、地域の意識・行動とアイヌの人々やアイヌ語・アイヌ文化の保存とは正の相関を示すけれども、少しでもネガティブな地域の意識･行動が見出される地域では、地域の「マイノリティ」を自任する人々が、アイヌ民族との交流に積極的であり、アイヌ語・アイヌ文化の保存に賛同しやすくなっていることを物語る。つまり、むかわのように地域の評価が高い地域では、地域の意識や地域への積極的関わりを高めることが同じ地域に暮らすアイヌ民族への理解を進めやすいことと、地域に問題を感じる人々が少なくない地域では、むしろその問題意識がアイヌ民族、アイヌ語・アイヌ文化への理解を進めるという状況が存在することを示している。

ただし第３に、同じくアイヌの人々に関わる項目であっても、経済的支援や教育支援は、交流や言語･文化の保存とは異なった構造をみせていた。経済や教育については、地域の「マイノリティ」であることよりも、地域住民同士の日常的な付き合いが活発であることを通じて、経済や教育の支援を当然と考える人々が多くなっていた。このことは、経済や教育といった社会経済的基盤の形成に深く結びついている領域については､地域の「マイノリティ」として地域を批判的に見ている人々よりも、実際に地域住民同士の交流の網の目に深くコミットしている人の方が、この種の問題意識を高めやすいことを意味している。

さらに第４に、聞き取りから浮かび上がった地域におけるアイヌの人々をめぐる状況は、その地域のアイヌをめぐる意識に一定の結びつきを持っていた。たとえば、表 10 － 28 の経済的支援に関する意識を問うた結果を見ると、伊達で有意差を生じている項目が多い。このことは、伊達の場合、有珠地区の住民はアイヌの人々との「平和的」な交流を重ねているのに対し、有珠地区以外ではあ

まりアイヌの人々との関わりは持たれていないといった地域内での明瞭な差が、アイヌの人々をめぐる意識の差にも結び付いている可能性を示唆すると考えられる。

これらをふまえると、アイヌの人々との交流やアイヌへの理解を促すことは、地域への評価を高めることや地域参加を進めることとパラレルな形で重なってくるものと捉えられる。そのため、まずは、地域の「マイノリティ」を自認する、地域に批判的なまなざしを持つ人々の問題提起を受け止め、地域づくりに取り組む必要がある。そのうえで、むかわのように、住民の過半数が、地域への評価や地域参加を積極的なものとしているような状況を目指すことで、結果としてアイヌの人々との交流やアイヌへの理解を高める人々も増えてくるという展望が見出される。

地域の「マイノリティ」を自認する人々がアイヌの人々との交流やアイヌ語・アイヌ文化の保存に積極的であるということは、逆にアイヌの人々に対する批判的まなざしを向ける人々は、地域の「マジョリティ」を自認する人々のなかにあることになる。つまり、地域の「マイノリティ」とアイヌの人々の結びつきと、これらとは立場を異にする地域の「マジョリティ」というある種の「対立」図式が存在している。この問題を解消するためにも、地域の愛着や地域参加をより積極的なものにする地域づくりに取り組み、むかわに見られるような地域の意識・行動とアイヌとの交流・意識の正の相関をつくっていくことに１つの可能性が見出されるのではないだろうか。

注

１）新藤（2015a：97）では、札幌の「とてもそう思う」を「7.7%」と表記していたが、「7.1%」が正しく、ここで訂正させて頂きたい。

２）新藤（2015a）では、札幌とむかわの比較から、家族の居住年数が持つ効果の方が大きいとした。しかし、５地域の比較を行うことで、とくに全体的にアイヌの人々との交流があまり活発でない伊達・札幌でも、自身の居住年数が長ければアイヌの人々との交流の活発になってくる傾向が確認できた。また、地域全体での交流が活発である新ひだかでも、家族の居住年数よりも自身の居住年数の場合の方が、有意水準がより厳密になっている。この点で、家族の居住年数の効果が大きいというのは、最もアイヌの人々との交流が活発であるむかわの特徴だと把握することが適切だと考えられる。

３）この点では、札幌やむかわでは、「昔からの文化･習慣を大事にする」地域だと感じている者ほど、「アイヌ文化を積極的に保存すべき」と考えているという傾向とは異なっている（新藤 2015a：105）。「昔からの文化・習慣を大事にする」の意味合いが、調査地域によって異なる様子がうかがえる。

４）ここでの「マジョリティ」「マイノリティ」は、必ずしも数字の上での多数派･少数派ではなく、自分にとって望ましい地域が形成されている、あるいは自分が望ましい地域を形成していけるなどと感じている地域への包摂度が高い者を「マジョリティ」と捉え、その枠に収まらない人々を「マイノリティ」と把握するという形で用いている。

５）バチェラー八重子は 1884 年に生まれ、1962 年に死去。

６）伊達火力発電所建設反対運動については、斎藤編（1983）、花崎（1988）を参照。

７）小中学校でのアイヌ文化学習については、新藤（2015b, 2015c）参照。

参考文献

花崎皋平，1988,『静かな大地――松浦武四郎とアイヌ民族』岩波書店.

掛川源一郎，1988,『バチラー八重子の生涯』北海道出版企画センター.

大黒正伸, 1998,「ウタリ社会と文化的記憶の葛藤――伊達市の社会調査」松本和良･大黒正伸編『ウタリ社会と福祉コミュニティ――現代アイヌ民族をめぐる諸問題』学文社，162-99.

小内透，2014,「問題の所在」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 31　伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，1-17.

斎藤稔編，1983,『伊達火力発電所反対闘争』三一書房.

新藤慶，2015a,「アイヌ民族との交流・アイヌ民族に対する意識と地域的要因」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その 4　地域住民のアイヌ政策への評価とアイヌの人々との社会関係――札幌市とむかわ町を対象にして　2014 年アイヌ民族多住地域住民調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター，95-114.

――――，2015b,「アイヌ民族多住地域としての白糠への評価」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 33　白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，211-29.

――――，2015c,「アイヌ文化学習の論理と展望――地域との関連に注目して」日本教育社会学会第 67 回大会報告.

（新藤　　慶）